

第12回幼児教育実践学会 口頭発表

異年齢交流での子どもたちの育ち



I - 6 四国地区 徳島県

学校法人神崎幼稚園

1. はじめに

本園は、昭和45年に創立し、徳島県阿南市に位置している。淡島海岸をひかえ、園庭には松や様々な木々が立ち並ぶワクワクの森があり、自然に囲まれた環境の中で四季折々に咲く花に触れ、小鳥のさえずりを聞きながら小動物と共に生活し、秋にはどんぐりや松ぼっくりを拾い集めて遊びに取り入れている子どもたち。また、ぐみや桑・ひめりんごなど実のなる木々が多くあり、子どもたちは自由に採って食べることができ、手が届かなくなると木に登ったり長い棒を使ったりして友達と一緒に試行錯誤する姿が見られる。年長児が春に田植えをした田んぼにはオタマジャクシやアメンボが住み着き、カエルになる過程や稲の生長を身近で観察することができる。稲穂が育つと、自分たちが鎌で稲刈りをしたり昔ながらの足ふみ式の機械で脱穀をしたりすり鉢やすりこぎでもみ取りをしたりし、お米の大切さにも触れている。そして、自分たちが育てたお米と野菜を使って玄米がゆを作り、年少児と年中児にふるまっている。

園舎は平屋建てで全ての保育室が園庭に面し、テラスでつながっている。健康で丈夫な体作りを心がけ、薄着・裸足保育を行い、登降園にはサンダルや草履を履いている。恵まれた環境の中で自然との触れ合いを通して多くの経験を積み、十分に遊び込む中で友達との関わりを深め、心豊かにたくましい子どもに育ててほしいと願っている。さらに、体操教室・リトミック教室・硬筆教室・英語教室など、専門講師の指導も取り入れている。

平成30年度より、満3歳児保育を始めた。今年度8月現在では、満3歳児8名・3歳児36名・4歳児41名・5歳児56名の計141名である。また、親子で集う未就園児保育“いちご組”を月1回行ったり、毎週金曜日に園庭開放“はだしっこ”を実施したりしていたが、昨年度よりコロナウィルス感染拡大防止のために中止をしている。

【教育方針】

- 健康でたくましい体づくりと、基本的な生活習慣を身につけられるようにする。
- 豊かな情操と人間尊重の芽生えを育てる。
- 生き生きとした表現活動を通して創造性を豊かにする。
- 自然に恵まれたよりよい環境の中で、たくましい自然児を育てる。
- 家庭や地域との連携を密にして一貫性を図る。

【教育の目当て】

- 自分から進んで遊べる子
- リズムにのれる、たくましい子
- 友達と仲良く、協力する子
- よく見、よく聞き、よく考える子
- 感謝の心と働くことに喜びを感じる子

2. 提案にあたって

幼稚園教育の基本として、幼児期は生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要な時期である。その大切な時期に、幼児がどのような環境とどのように関わり、何を感じ何を考えるのか。幼児を取り巻く様々な環境が人格形成に大きく関係していくと考える。保育者は幼児との信頼関係を十分に築き、幼

児一人一人が自分の居場所を見つけ、安定した気持ちでのびのびと幼稚園生活を送れるようにすることが重要である。変化の激しい社会において、どんな場面でも自己を発揮しながら他人とも協調し、柔軟な感性をもつことが大切だと考える。また、幼児にとって重要な学びである“遊び”が保育者主導ではなく、幼児自身が意欲的に遊び込むことや能動的に様々な環境と関わっていくことが重要だと考える。身体全身で思いっきり遊んだり、五感に触れる感情を伴う体験をしたり、友達や保育者と共通のイメージや目的をもって一緒に活動したりすることが大切だと考え、取り組んできた。幼児は、ありのままの自分を受け入れられ集団の中で認められていると実感することで安心し、様々な場面において自分を表現したり相手を認めたりできるようになるのではないかと。そして、日々の生活や行事を通して充実感や達成感を味わい自信となることが、活動への意欲や仲間意識の育ちにつながると考える。

平成30年度からはじめた満3歳児保育。3歳児2クラスにそれぞれ満3歳児を入れ保育を進めた。学年の違う幼児が共に生活することで生まれるよさもああったが、関わり方や製作などの進め方に悩むことも多かった。平成31年度より新たに満3歳児クラスを作り生活している。保育室や担任・普段の生活は別々になったが、リトミック教室や体操教室などは3歳児クラスに交じって一緒に活動している。本園は、異年齢の子どもたちの関わりも多く、年少児が年長児の保育室で遊ぶ姿や園庭で年中児と年長児と一緒に円形ドッジボールやかくれんぼ・竹馬をする姿など、異年齢児が誘いあって遊ぶ様子が頻繁に見られている。また、満3歳児・3歳児のお昼寝の時間になると、年長児の数人がトントンして寝かしつけにいたり、園庭に脱ぎっぱなしになったサンダルがあれば届けにいたり、泣いていたり困っていたりする子がいれば走り寄って行って声をかけ、先生のところへ連れていく姿が見られる。それらを通して、年少児や年中児は年長児を頼ったり憧れを抱いたりし、年長児には思いやりの気持ちや優しい心が生まれたり活動への意欲や自信につながったりしていると改めて感じる。

○実践事例 《3歳児クラスの生活と異年齢児の交流》

<事例1>

昨年度満3歳児で入園した進級児8名と新入児1名の9名でスタートする。進級児は園生活の流れは分かっており、スムーズに活動を始める。新入児も少し戸惑う姿が見られたものの、周りを見ながら何となく動き出している。進級児のH児は新入児のI児の様子をととても気にしており、I児が慣れないサンダルでなかなか歩けず、脱げてしまう度にH児がしゃがんで手を添えたり、一緒に手を引いて歩幅を合わせて歩いたりする姿が見られた。

【4月】I児を含め17名の新入児が入園してくる。入園式翌日、保育者は泣いている子や保護者への対応、新入児の登園活動の援助などに追われる。進級児は身の回りの始末など、登園時の活動は自分でできることも多いので、保育者は様子を気にかけて「タオルはそこに出しておいてね」「シール貼るところ分かるかな？」などと声をかけるが大騒ぎの雰囲気に圧倒され、普段泣かない子が泣いたり表情がこわばって壁際に引っ付き固まってしまったりしている子がいた。次の日、泣いて登園する新入児は昨日に比べ少なくなる。しかし逆に登園を渋る進級児の姿が見られた。「先生とあまり一緒におれんけん、寂しいんよな」と保護者から子どもの不安を代弁するような声もあった。

【5月上旬】子どもたちも少しずつ園の生活にも慣れてきて、登園時に泣く子が少なくなる。子ど

もたち以上に新しい環境に不安を感じていた新入児の保護者もあり、園での様子を伝えると、安心して涙を浮かべる場面もあった。進級児の保護者も不安を感じる人が多く、おねしょや夜泣きなど今まであまりなかった子どもの様子が増えたと言う。保育者は保護者の不安な思いに寄り添っていった。

【5月中旬】新入児は生活の流れが分かるようになると、できることは少しずつ自分でしようとするようになる。進級児はいろいろな場面でできることを自分なりに進めていくようになる。その姿を見て、新入児も影響を受け真似ながらしてみようと頑張る様子が見られた。

【6月】進級児、新入児の大きな差は感じられなくなってきたが、進級児の方が園生活の経験が多い分、製作活動や遊びにおいて「私の真似してみてよ」「こうやったら上手にできるよ」などとリードしながら活動する場面も見られる。

<考察>

進級児は園生活に慣れているので、初めのうちは新入児を気かけたりお世話をしたりして、少しお兄さん・お姉さん気分を味わっている様子であった。しかし、大勢の新入児が入園し、環境が変化したことにストレスや不安を感じたようだ。また保護者も同じように不安な気持ちを抱えているのを感じた。<慣れているから大丈夫><できるから大丈夫>ではなく、進級児・新入児に関わらず環境の変化は同じなので、進級児にもきめ細やかな配慮が必要だと改めて感じた。降園時に子どもたちが自信をもって生活をする様子や伸び伸びと遊ぶ様子を伝えていったことで、保護者の不安を取り除けていったのではないかと。

同じ3歳児クラスの中に、昨年度から園生活を経験している進級児と初めての園生活を送る新入児が共に生活することで、モデルになったり刺激しあったりして関わっている。できて当たり前ではなく、個々の発達に添った保育を大切に進めていきたい。

<事例2>

～K児の姿（3歳児）～

入園当初から不安と緊張の表情を見せ、なかなか動き出せず、保育室の決まった場所で1日を過ごし、友達の活動している様子を傍観する姿が伺えた。保育者が遊びに誘ったり、何気ないやり取りができるよう話しかけたりK児に寄り添っていくことで少しずつ動き出せるようになるが、表情は硬い。5月下旬頃から少しずつ自分のしたいこと、して欲しいことを保育者に伝えることが増えてきた。友達の様子は気になるものの、言葉を交わしながら一緒に遊ぶ姿はあまり見られなかった。

～S児の姿（満3歳児）～

5月、満3歳児での入園はS児1人だった為、しばらくの間3歳児クラスでの生活となる。常に保育者との1対1での関わりを求め、少しでも保育者の姿が見えなくなると不安定になり泣く日が続く。少しずつ園生活に慣れてくると、保育者から少し離れてクラスの子と関わって遊ぶことができるようになってきているが、視界から保育者がいなくなると不安になり遊びから抜け保育者を探す姿が見られる。

【6月中旬】給食後、K児はいつものようにままごとコーナーでお昼寝が始まるのを待つ。S児は

保育者が給食の片付けを終えるのを待っていた。待ちきれずに「先生、早く」と催促をするS児に「まだ食べてる子がいるからね。もう少しかかるかな」と保育者が応えるやり取りを何度か繰り返していた。その様子を見ていたK児が「一緒にいこ」とS児に声をかける。一瞬戸惑ったような表情を見せたS児だが、手を繋いで一緒に保育室続きの和室へ行き、ブロックをしたり、追いかけてっこを始めた。次第に大きな声で話し、笑い合う2人の姿があった。

<考察>

なかなか自分から動き出せずにいたK児と、保育者に依存しがちなS児が自分たちで活動し始めたことの背景には様々な<人的関わり><物的関わり>が考えられる。

まずは異年齢の2人が同じ空間で共に生活する環境があったこと。普段、2人の間に直接的な関わりはあまり見られなかったが、1か月という期間ではあるが共に生活してきたことで、互いに親しみを感じたのではないかと思う。

次に、保育者が幼児の気持ちにゆっくりと寄り添い関わっていったこと。K児は1日同じ場所で過ごし、初めてのことや大勢での活動などを嫌がるが多かったが、活動に参加することを無理に促すことはせず、K児が興味をもちそうな遊びを提案したり、何気ないやり取りをしたりして、K児が動いてみようと思えるように心がけてきた。また1対1での関わりを求めるS児の気持ちを汲み取りながら、S児が安心して遊べる環境作りを行い、他の子も一緒に関わりながら遊べるよう心がけてきた。

そして、幼児の姿を肯定的に受け止めること。K児はいつも保育室の同じ場所に立ち1日中その場所で過ごすことも多く、ただ傍観しているように見受けられるが、そうではなく、クラスの様子や、S児の姿、保育者のS児への関わりなどよく見ていたことが、K児との会話を通して分かった。また、K児は普段の様子からS児に対して<お姉さんである>という意識をもっていたように思う。見ていたからこそ、S児に自分から「行こう」と声をかけることができたのではないかと思われる。

この事例を通して、一見K児がS児をお世話するという一方向の関わりに見えるが、そうではなく、互いに作用しあっているように感じた。自分からなかなか動き出せずにいたK児だが、<S児のお世話をする>ということが活動の動機となり自分から声をかけ、S児の反応を得たこと、また保育者から「優しいね」「ありがとう」と声をかけられることも自信につながったと考えられる。

<保育者の思いと今後の課題>

事例1では、昨年度から園生活をしている幼児と初めて園生活を送る幼児が同じクラスで過ごすことが進級児の不安感やストレスとなり、以前はできていた活動さえもできなくなってしまった。保育者が進級児の<経験値>に頼ってしまい、子ども一人一人に向き合うことができず、安心感や自信をもたせることができなかつたことが要因の1つであった。だからこそ気持ちに寄り添い、安心できるような言葉かけなど、きめ細やかな配慮が必要であった。経験者と未経験者が環境の変化を受け止め、相互に作用して育ち合っているような環境・関係作りに努め、一人一人の子どもがもっている力を引き出していくことが保育者にとって重要な役割であると改めて実感させられた。

事例2では異年齢児が同じ空間で生活することによってお世話をしたり、されたり、また自信につながったりなど互いに補いながら成長している姿が見られたように思う。K児が傍観している時間はただじっとしているのではなく、集団生活を自分の中に受け入れていくための準備期間であり、友達の様子や保育者の関わりを見て自分なりにイメージしていたのではないかと思う。K児を無理に活動

へと促すのではなく、その姿を受け止め見守ったことが友達に自主的に関わろうとする姿につながったのではないだろうか。

2つの事例を通して、園生活の経験が違う幼児や異年齢の幼児が共に生活する中で、よきモデルとなったり、自信につながったり、思いやりの心が育ったりすることもあれば、ストレスとなることもある。それに対応するには保育者の専門的な力量が必要になる。子どもの現状に合った人的・物的環境の構成はもちろんのこと、幼児の発達の実情を的確に把握し、一人一人の幼児の個性や発達の課題を捉えること、また幼児を肯定的に見て、そのよさや可能性を捉えることが必要である。

<事例3>

幼稚園生活において、年少・年中時に経験した年長児との様々な交流がある。異年齢交流について具体的にどういったものがあるかを考えたところ、大きく分けると、『遊びの共有』『お世話』『遊びの中の援助』『自発的関わり』『視覚的伝承』『教える』の6つに分類することができた。多くの場面で自然と見られる異年齢児の関わり。それらによって、年少児・年中児にとって年長児は憧れの存在となっている。

幼児の生活の中心は遊びであり、その全てが学びである。普段の遊びの中でも特に生活に密着した身近な遊びであるごっこ遊び。お店屋さんごっこやお祭りごっこでのお買い物遊びなどもあり、本物の食材を使ったものは感動も大きく印象に残りやすい。年少・年中時の5月に、年長児が柏餅を作り、おすそ分けをしてもらった。また、園内で育てたじゃがいもを収穫した当日に塩ゆでして食べたり、7月の七夕まつりでは年長児が育てた夏野菜入りのみそ汁を振る舞ってもらったりした。そういった経験がきっかけとなり以下の事例につながっていったのではないか。

～ちっぷすやさん～

年中時に園庭の畑に植えたじゃがいもとそら豆。水やりや草抜きをしながら大切に育て、年長になった5月に自分たちで収穫をした。「うわあ！赤ちゃん芋もある」「これ大きいよ」「いっぱいついでう！」などとじゃがいもを収穫。「おいしいだろうなあ」「はよ食べたい」と子どもたち。すると、その中の1人が、「あっ、ちっぷすやさんしようだ」と言うと、周りにいた子たちも、「それいいなあ！」「したい！」「小さい組さんに食べさせてあげよ」などと賛同。「ほんまやな。ちっぷすやさんしようか」と保育者。「する！」とみんなで盛り上がった。

そら豆は、それぞれにさやをちぎって中からお豆を取り出した。「そらまめくんのベッドやなあ」「ふかふかしとる」「触ってみたらふわふわで気持ちいい」などと、楽しみながら収穫をする。

【5月13日】翌日の“ちっぷすやさん”に向け、それぞれの係を決めたり準備をしたりする。子どもたちと何が必要かを相談し、年少児と年中児に配るチケット作りと、お店の看板作りを行うことになった。チケット作りでは、画用紙をちょうどいい大きさに切っていき、その画用紙に『ちっぷすやさん』と書いていき、できたチケットの枚数を数えていきなど、自然と分担されて進んでいた。中には、『おいしいよ』『たべにきてね』と書かれたチケットもあった。看板作りでは、机の幅に切った大きな画用紙に筆で1文字ずつ交代しながら、『ちっぷすやさん』と書いていき、字の周りに絵も描いて仕上げる。そして、当日の受付係・案内係・店番係・盛り付け係の4つからしたい係をそれぞれに決め、当日の動きを確認した。

【5月14日】収穫したじゃがいもを使って年長児がクッキング。子どもたちがスライサーを使って薄くスライスしたものを保育者が油で揚げてポテトチップスを作った。じゃがいもを揚げている間に、昨日作ったチケットを年少児と年中児の保育室へ配りにいく。そして、それぞれの係の配置にスタンバイした。ドキドキ・ワクワクした表情の年長児。年少児や年中児のお客さんが来てくれると、「いらっしゃいませ」と受付係の元気な声が聞こえ、案内係がマンツーマンで優しくお店の前へ連れていき、店番係が「どうぞ」とポテトチップスを渡す。案内係はテーブルまでゆっくりとエスコートし、椅子に座らせてあげていた。年少児の中には初め緊張した様子で表情をこわばらせている子もいたが、年長児に優しく声をかけられ椅子に座るとポテトチップスを食べて笑顔を見せていた。お店の奥では盛り付け係が揚がったチップスをどんどんお皿に盛りつけ、おかわりにきた子にも手際よく対応していた。お客さんたちがみんな帰ると、「大人気だったなあ」「忙しかったわ」と言いながら、目を輝かせていた。その後は自分たちも交代でお客さんになり、ポテトチップスを味わった。

<考察>

“ちっぷすやさん”は、自分たちが年中の時に年長児にしてもらった経験があり、じゃがいもを収穫したことで思い出したのだろう。様々な経験を通して年長児への憧れを抱き、実際に自分たちが年長になった時に年少・年中児にしてあげたいと思うようになったようだ。自分たちで植えて育て収穫した野菜を使ったクッキング。立派なじゃがいもを収穫したことで昨年度の嬉しかった記憶がよみがえり、今度は自分たちがしてみたいと思いそこから発展したお店屋さん。自発的な活動で意欲もあり、幼児の“やってみたい”という思いを保育者が受け入れ、時間や場の確保をしたことで実現することができた。前日の準備も一人一人が本当に楽しそうで、年長児みんながお互いのよいところを認め合っている温かいクラスの雰囲気や仲間関係があり、当日の係も自然と分担できたのだろう。そこには、個々の成長を通して集団意識が高まり、友達と一緒にイメージを膨らませながら協力し、考えていくという協同的な学びがあった。また、“ちっぷすやさん”当日も自分たちが先に食べたいということよりもおもてなしの気持ちで年少児・年中児に早く食べてほしいという思いが大きかった子どもたち。園のお兄さんお姉さんにしてもらって嬉しかったことを今度は自分たちがしてあげたいと考えたり、丁寧にお世話をしたりと、思いやりや優しい気持ちが育っているのだと思う。自分たちで決めた係をしっかりとこなしていく姿は、とても主体的で自信に満ち溢れていた。そして、そんな思いを受けた年少児や年中児も保育者や年長児に見守られながらクラスや学年を超えて外の世界に踏み出す一歩になっている。これをきっかけに遊びや活動の場が広がっていくだろう。

<保育者の思いと今後の課題>

普段の生活の中で、園庭や保育室で異年齢児が交流したり誘い合って一緒に遊んだり、年長児の姿を見て憧れを抱いたり刺激を受けたりすることは多くあるが、偶発的に個々の交流としてあるものだけではなく、幼児の思いや遊びからクラスや園全体の活動として計画的に進めていくことも必要だと感じた。年長児にとって、自分が年少・年中の時に年長児から優しくしてもらったことが基盤となり、思いやりや優しい気持ちの育ちにつながっていると思う。過去の経験を活かしたり共通の目的に向かって友達と協力したりすることが、一人一人の自信や意欲にもつながっているのだろう。また、普段なかなかクラスを超えて遊びや生活の場を広げていけない年少児にとっても、貴重な経験になったと思う。改めて異年齢児の交流の大切さやよさを実感することができた。

日々の生活において、保育者は幼児の思いや遊びに寄り添い、認めながら、遊びや活動に必要なこ

とやものを読みとり、その都度対応している。ルールのある遊びでは、幼児が理解して遊べるように仲立ちをしたり、ショータイムやお店屋さんごっこでは、その場にはいるがなかなか積極的に行動できない幼児をそっと見守り励ましたり一緒にやりとりを楽しんだりしている。特に、異年齢児の交流は偶発的に生まれることが多く、よりていねいな関わりが求められる。そのため、保育者自身が気持ちにゆとりをもって生活することで幼児一人一人の思いに気付き十分に認めて受け入れることができ、子どもたちが視野や活動範囲を広げて他クラスや他年齢の子との関わりを楽しみ充実させることができるのだと思う。これらのことを心にとめながら、異年齢児の交流をこれからも大切にしていきたい。

3. まとめと課題

本園では、「異年齢の交流」をテーマに園内外における子ども同士の交流と、それを支える保育者の関わりについて考察してきた。

事例検討を行う中で、幼児の発達段階によって保育者の関わり方や援助は違ったものになることが明らかになった。例えば、年少では、保育者との関わりが幼児の発達や遊びにおいて大きな役割をもつ。年中では、それを基盤として友達とのつながりが増えていく。年長になるとそれまでの過程や経験を通して自己を発揮しながら互いの存在を認め合い、子ども同士で遊びを深めたりモデルとなったり協力したりすることができるようになる。以上のことから、保育者が、各年齢の発達を意識し、個々に応じた援助をすることが望ましいと考えられる。

異年齢児の交流においても、そういったそれぞれの年齢の育ちを土台として、年上の子は自然に年下の子を思いやり、年下の子はしてもらったことや見聞きしたことに対して尊敬や憧れをもつ姿が見られる。そのような自然の流れが日常生活を豊かなものにし、子ども同士の活動がより活発なものになるのだと思われる。個々の性格や育ちを十分に理解した上でありのままの幼児を受け入れ、小さな成長や変化にもしっかりと目を向け認めることで幼児の活動意欲は大きく変わるのだと改めて感じた。

そこで、保育者はどんな時も焦らずゆったりとした気持ちで幼児一人一人と関わり、その力を信じて長い目で見守ることが大切だと考えられる。これからも、園内研修を充実させることで共通理解を図り、全職員で全園児を見守りながら、異年齢児の交流を継続していきたい。